

# 発想を豊かにするきっかけとしての「粘土遊び」

神 谷 睦 代

Claywork to Encourage Children's Inventiveness

Mutsuyo KAMIYA

粘土は子どもにとって親しみやすく、また表現の可能性の面からも魅力的な教材である。が、その扱いや指導方法の困難さによって、昨今造形学習の場では敬遠されがちな状況にある。そこで、本稿では特に粘土造形における子どもたちの表現力を高める為に、どのような指導の在り方が望ましいのか、「粘土遊び」の実践を通して検証していく。

## 1 はじめに

今日の図工学習の中で、粘土が教材として用いられる機会は工作や平面に比較しても少ない。<sup>1)</sup>さらにその粘土教材にしても、油粘土が主流を占め天然の粘土の使用度はきわめて低い。その理由には、保管や扱いの困難さが多くあげられている。一方で天然粘土の造形活動の具体的な方法や効果的な表現への指導がわからないという意見もきかれる。前者の粘土の扱い方や管理に関しては、それなりの工夫をすれば解決できる課題であるが、後者の指導方法の不明瞭は、確かに一層粘土造形を敬遠させてしまうと考えられる。

筆者も、過去の授業実践のなかで油と天然の両方の粘土を用いてそれぞれ活動を行ったことがあるが、ただ、特に指導もせず粘土を与えているだけでは油粘土も天然の粘土もできあがった作品は、装飾的かつ平面的な粘土細工風の作品に仕上がる。いいかえれば、粘土の質やそれぞれの特性を生かした造形活動は行われなともいえる。即ち、この点に指導者側の困惑が伺えるといえるだろう。このことに関して、興味深い内容を中川織江が『教育美術』の連載「粘土遊びの心理学」の中で紹介しており、自由に制作した粘土作品を「詳細に見ても、十歳、二十歳、三十歳という年齢による作品のでき具合の違いは判別できないでしょう。実際に評価してみても、年齢による差はありませんでした」<sup>2)</sup>と本文中で述べている。中川の指摘からも、殊に天然の粘土（以下天然の粘土は粘土と称する）造形に活動に関しては、子どもの個性や豊かな創造体験を導く為には、何らかの方策あるいは具体的な指導が求められるであろう。筆者自身も「粘土の持つ可能性や魅力である可塑性や重量感をいかした造形活動を展開するには、どのような指導を行えばよいのか」が、粘土学習を続ける中で一つの課題であった。そのような中、偶然さつきが丘西小学校の粘土学習の様子を見る機会に恵まれ、そ

こで出会ったのが「粘土遊び」である。

「粘土遊び」では、子どもたちは一人2キロの粘土を用いる。始めからいきなり個人の作品作りに突入せず、まずは粘土遊びと称して、団子づくりやひもづくり、そして塔のようなひねり出しを行い粘土の扱いや手触りを楽しみながら活動する。そして、粘土に慣れ親しんでから個人の表現へと進んでいく。このことによって、粘土を余すことなく塊でとらえ、かつ動きのある、ダイナミックな作品作りが可能になった。2時間に及ばない授業であったが子どもたちの全身を使って、夢中に取り組む姿や作品からつたわる感動や達成感は、今までに見たことがない驚きであった。

現在の美術教育では、教師の指導は「支援」として語られている場合が多い。主体は子ども自身であるから彼らの思いを大切にしながら教師は見守る姿勢をとるというものである。が、この捉え方は一見子どもの立場を尊重しているようであるが、別の視点からみれば単なる放任の感も否めない。特に、粘土造形では指導をせず、子どもたちの自由に任せると先にも述べたように作品の幅が固定される傾向が見受けられる。そこで、子どもが生き生きとした個性的な表現活動を展開するためにも、粘土造形学習に関しては指導するべきところと子どもたちに任せるところをどう設定するかが肝要と思われる。

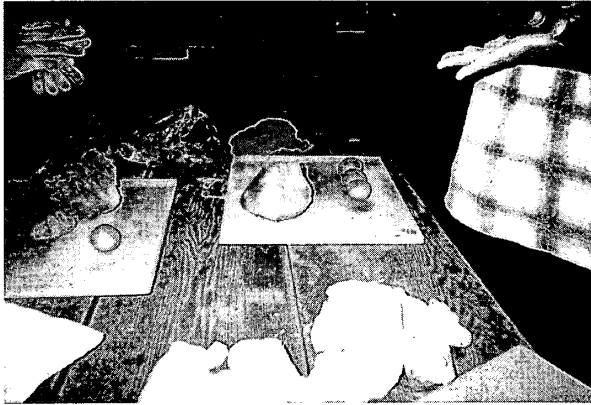
本稿ではこのような美術教育に関する問題意識をもとに、粘土造形における子どもの自主的な表現活動を深めあるいは拡大するために、「粘土遊び」の実践を通して指導のポイントを考察していきたい。特に今回は、将来幼稚園教諭や保育者をめざす筆者の受け持つ講義の受講者50人を対象に、「粘土遊び」の活動を行い、作品のできあがりの具合や変化、また学生のアンケートに基づいて検証を行う。

## 2 「粘土遊び」の実践

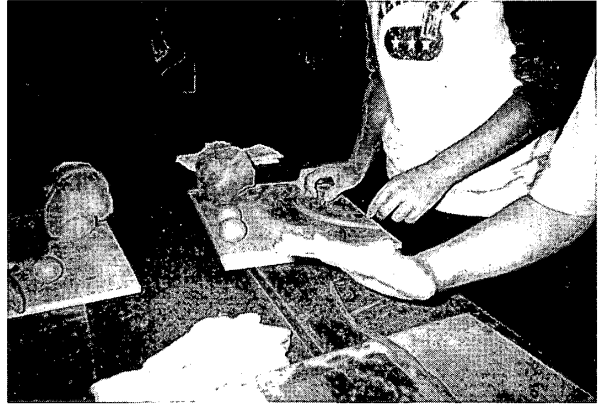
### (1) 「粘土遊び」の方法

粘土は、1人につき2キロずつ配る。①団子づくり→②ひもづくり→③粘土を一つにまとめて団子にする→④ひねりだして塔を作る→⑤倒れた塔の形から思い思いに自分の制作に活動に入る。時間は、それぞれ10分くらい。塔は粘土を上につかみ上げるが、根元のところを特に伸ばすようにする。また、塔は自然に倒れるまで高く伸ばすのがポイント。

発想を豊かにするきっかけとしての「粘土遊び」



①団子づくり



②ひもづくり



③ひねりだして塔にする。



④塔の完成



⑤たおれた塔からできた像



⑥ドラゴン

(写真提供：千葉市立さつきが丘西小学校)

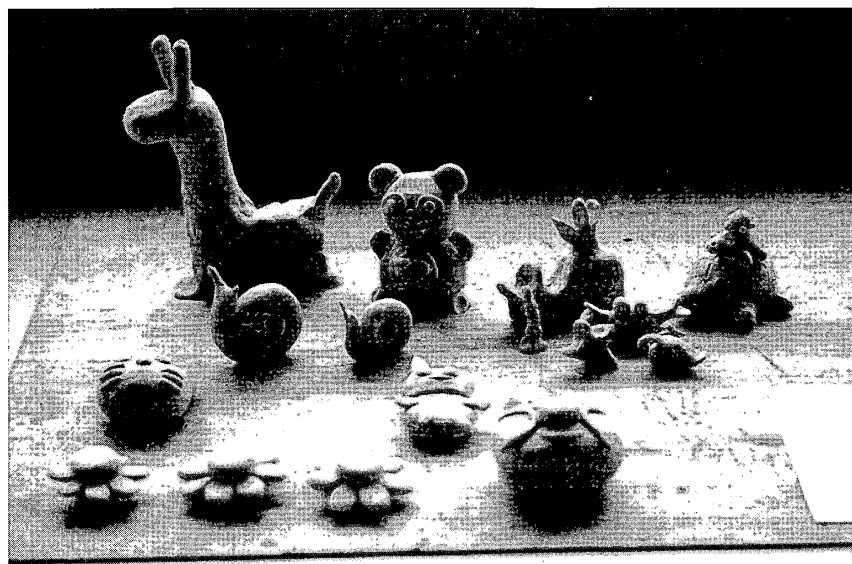
(2)「粘土遊び」を行う前の活動

ア・学生による、油粘土の活動。作品とその傾向。

講義の1時間を用いて、活動を行った。1人分の粘土は500グラム。ヘラや竹串も利用。特に指示は与えない自由制作。学生からは「懐かしい」「面白い」「楽しい」「匂いがきつい」等の声が聞かれた。

出来上がった作品の内容は、動物・アンパンマンやキティちゃんのキャラクター・ケーキ。お弁当・乗り物・皿や器・・・と色々な種類に分散されている。

共通した特徴は、細部までしっかりと作られており、正面性のつよい、四角いあるいは平面的な印象を受ける点である。(写真A参照)



[写真A：油粘土による作品]

イ・学生による、粘土の活動。作品とその傾向。

油粘土の活動を行った次の週に、講義の1時間を用いて活動を行った。1人分の粘土は2キログラム。ヘラや竹串も利用。自由制作。学生からは「粘土が固い」「力がある」「すぐ乾いてくる」「匂いがいい」「さわり心地が冷たくてきもちいい」等の声が聞かれた。

出来上がった作品の内容は、油粘土のときとあまり変わらず、細工的な仕上げ方が多くみられた。ただ、油粘土のときに比べ、はるかに多量の2キロの粘土は、大方残してしまう結果となった。できた作品よりも余った粘土のほうが多い学生も少なくなかった。(写真B参照)

発想を豊かにするきっかけとしての「粘土遊び」



[写真B：粘土による作品]

### (3) 「粘土遊び」を行った後の活動

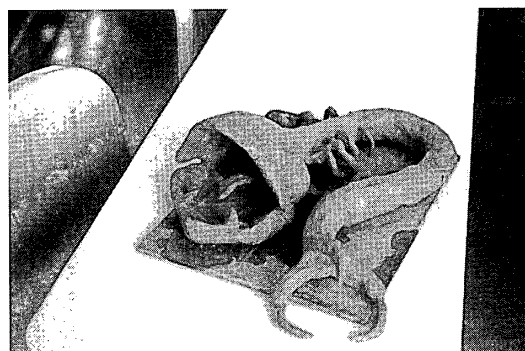
「粘土遊び」の後に出来上がった作品は、共通的な特徴として、粘土を全て使う・塊として表現・動きや迫力がある・立体的・空間的・・・といった点があげられるだろう。

「粘土遊び」を行った結果、油粘土の特性と粘土の特性の違いがわかり、粘土の特性に合わせた作品作りが可能になったと、作品から見てとることができるといえるだろう。

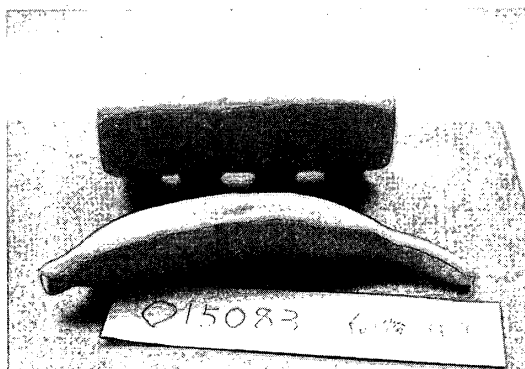
◎写真：同一学生による「粘土遊び」前と後の作品の変化



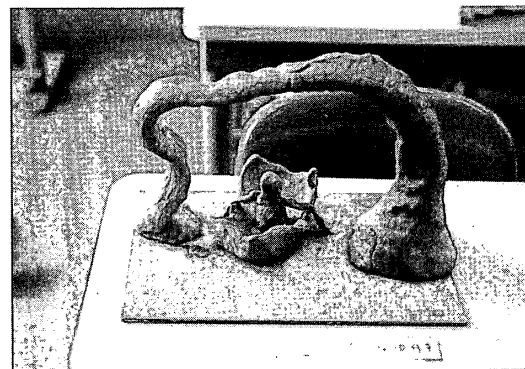
[学生A] (前)



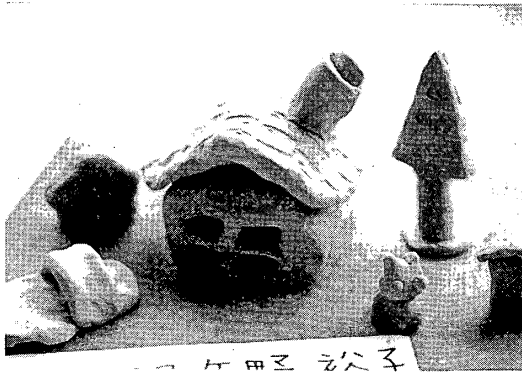
(後)



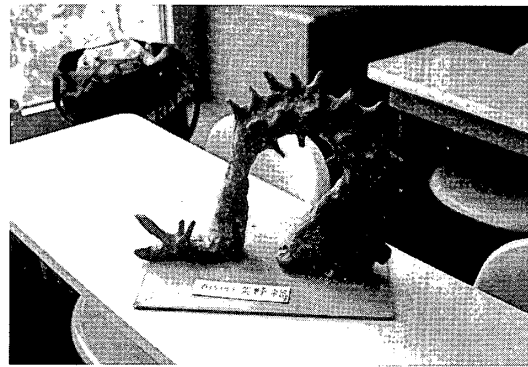
[学生B] (前)



(後)



[学生C] (前)



(後)

### 3 学生によるアンケート調査（対象：短大生50人）

#### (1) 油粘土について

##### ◎質問内容

- a 過去（幼稚園・保育園、小学校、中学校、高校等）に  
油粘土学習を行ったことがありますか

（回答）ある：48人 ない：2人

- b 油粘土活動の良い点

（回答／複数）

- ・ やわらかい（21人）
- ・ 細かい形ができる（28人）
- ・ 自由に形が作れる（18人）
- ・ かたまらない（21人）
- ・ 簡単に出し入れができる。扱いが楽。（12人）

- c 気になる点

（回答／複数）

- ・ 匂い（25人）
- ・ 手がべたべたする（30人）
- ・ 爪にはいる（3人）
- ・ 重さがでない（3人）
- ・ 保存できない（2人）

(2) 粘土について

◎質問内容

a 過去（幼稚園・保育園、小学校、中学校、高校等）に

粘土学習を行ったことがありますか

（回答）ある：23人　　ない：27人

b 粘土活動の良い点

（回答／複数）

- ・ やわらかかったり、固かったり色々な感触が楽しめる。(18人)
- ・ 焼成して残せる。(25人)
- ・ 自由に形が作れる (18人)
- ・ 匂いがない (11人)
- ・ 動きのあるダイナミックな作品創れる (10人)
- ・ 押したり、握ったりした跡がついて手の温かみを感じられる。(3人)
- ・ 重量感・存在感がある。(12人)

c 気になる点

（回答／複数）

- ・ すぐ乾燥する。(48人)
- ・ 管理が大変 (3人)
- ・ 汚れる (3人)
- ・ ひびが入りやすい (2人)
- ・ 保存できない (2人)

### (3) 粘土遊びについて

#### ◎質問内容

a 粘土遊びを行う前と後では作品にどのような変化がでましたか？

①	前：小さく細かい。油粘土も粘土も同じような作品。 後：粘土を全て使い、大きく迫力のある作品に仕上がった。	18人
②	前：頭に浮かんだイメージ。 後：意外なものが出来上がった。	11人
③	作品の発想が豊かになった。	7人
④	前：作りやすいもの。自分の好きなものを作る。 後：自分の思いや伝えたいことを表現。	6人
⑤	前：四角い。平面的。 後：立体的で作品に動きと存在感が生まれた。	3人
⑥	何かを作ろうと思って粘土造形をするのではなく、そこにある形から想像して、イメージを膨らませるようになった。	2人
⑦	粘土の扱い方がわかった。	2人
⑧	作品全体の雰囲気や味が出た。	1人

b 粘土遊びの活動の意義は何ですか？

①	想像力が沸く。豊かになる。	15人
②	作品の幅が広がる。	7人
③	出来上がった時に、達成感・満足感がある。	5人
④	想像力が働かない場合には、ある程度、形ができているのでやりやすく、又決まった形から想像力を働かすことができる。	3人
⑤	粘土に全身で取り組む。	3人
⑥	まず、色々な形を作る中で粘土の手触りや固さなどを知る。粘土の形をもとに、自分でイメージを膨らませ、その形を基に作る。粘土の性質をしり楽しむ。	2人
⑦	自分でも思いもしなかった、心の底のイメージが形にできた。自分の内面を思い切り外に出すことができる。ある意味ストレスの発散になる。開放感・達成感がある。	1人
⑧	頭も手もフルに使えた。	1人
⑨	油粘土との違いを知る。粘土と触れ合う。練る。伸ばす。ちぎる。つける。等の体験をする。自由に思っていること、考えていることを表現する。	1人
⑩	集中力がついた。	1人



#### 4 考察

今回の実践によって、冒頭に紹介した中川の指摘通りに短大生（2年・二十歳）の場合も、油粘土・粘土に関わらず自由制作のときは、正面性の強い平面的かつ細工的な作品に仕上がることが明らかになった。また、油粘土と粘土の特性の違いを生かした作品作りにもなかなか発展しないといえる。が、「粘土遊び」を行った後では、粘土作品に一見してわかる変化がみられた。塊の魅力を生かした大胆かつ迫力のある作品が生まれた。つまり、学生は「粘土遊び」を通して、粘土の扱いやその変化を体験的に習得し、さらにできた形からさらに新たに形を生み出す、いわば発想の膨らませ方を感覚的に把握したようである。

一方アンケートの結果からは、油粘土と粘土の特質やよさ、あるいは欠点などそれぞれの粘土の違いについて、手触りや、扱い方また匂いなど一応明確な認識を持っていることが伺われる。さらに、「粘土遊び」の前と後では、粘土造形の取り組みについて大きな意識改革が起こり、学生の「自分でも思いもしなかった・・・」という言葉に示されるように、粘土造形の活動意義が始めて発見できたような意見が多数あがった。

よって、「粘土遊び」は、二十歳の学生にとっても表現豊かな粘土造形活動を行う上で、特にその扱いと発想力を引き出す上で有効な、指導法・学習内容であるといえるだろう。また、ポイントは団子作りからひもづくり、塔など、次々と形を展開させていく中で、自然と粘土の扱いや、形や空間についての意識を持たせていくことが「粘土遊び」の良さであると思われる。つまりこのような誘発的な指導形態は個人の自由な発想へと無理なくつながっていくこともでき、「指導」というより「支援」という立場に近いものともいえよう。

学生の大半は油粘土の活動の経験はあったが、粘土は半数近くが未経験であった。この実践によって油と天然の粘土双方の粘土活動の特質や違いに触れ、学生自信が自分でも驚くような達成感や感動のある粘土造形活動を行ったことで、幼稚園や保育園、小学校の現場に出たときには是非粘土造形活動を子どもたちに教えてあげたいという気持ちにつながったことは何よりである。

#### 5 まとめ

『「粘土遊び」を行う前とその後では、発想が違っていた。「形をつくる」というよりも「何かを表現する」という方向に気持ちが変わった。』これは、アンケートに書かれた学生の言葉であるが、この度の実践を通して筆者も今一度考えさせられるいくつかの発見があった。

まず、幼稚園や小学校低学年においても油粘土は主流であるが、表現や造形の学習という点では、それほど活躍していないようである。扱いも簡単であるがそれだけに細工的な仕事に収まりやすいといえる。よって、「表現」や「造形」という角度からみれば、やはり粘土のほうが可塑性を生かしてダイナミックな作品作りができるという面からも期待できるといえ

るのではないだろうか。といっても、ここでは、どちらの粘土がよりよいかという二者択一の問題を取り上げているわけではなく、今後は油粘土と粘土それぞれのよさや特質を生かし、子どもたちの表現の可能性を深める粘土造形活動を行っていくことが重要なのである。そのためには、「粘土遊び」も“表現の根っことなる発想”を豊かにする一つのきっかけとして、大いに取り入れていくことを提言したい。

尚、本稿では短大生を対象にした実践から結果を立ち上げているが、筆者は小学生低学年や幼稚園でも「粘土遊び」の実践を試みている。そこで、これからの課題として発達段階に照らし合わせて「粘土遊び」が表現活動にどのような意味や効果<sup>3)</sup>を及ぼすかも引き続き検証していく。また、今回は主に天然の粘土についてその表現の可能性や指導のポイントに触れたが、天然の粘土に対して油粘土の特質やよい点も共通理解できたことから、油粘土の持ち味を生かした表現のあり方も改めて捉えなおしたい。

本稿を執筆することに際して、さつきが丘西小学校の色部和子先生には多大なるご指導・ご協力をいただきましたこと心より感謝申し上げます。

## 註

- 1) 拙稿「新教育課程に向けての美術教育Ⅲ 粘土造形学習の今日的状況：その課題と問題点—千葉市立小学校でのアンケート調査より—」、千葉敬愛短期大学紀要第23号、p49-67, 参照のこと。
- 2) 『教育美術』4月号、財団法人教育美術振興会、2002年、p61-62
- 3) 粘土造形の心理学的・行動学的面からのアプローチについては中川織江が「粘土造形の心理学的・行動学的研究—ヒト幼児およびチンパンジーの粘土遊び—」、風間書房、2001年に研究をまとめている。